【文化構想学部　現１年生　対象】

2021 年度における複合文化論系への進級について

１．複合文化論系とは――「時空を超え、文化の複合的な構造を解明」

複合文化論系は、社会・文化現象を総合的に研究する 4 つのプログラム（言語文化、人間文化、超域文化、感性文化）から成り立っています。その研究対象は幅広く、衣食住をはじめ、言語、文学、芸術、哲学、思想、宗教、美意識、メンタリティー、政治、経済、医療、さらには国際関係をも内包しています。

これら 4 つの領域は独立しているようでいて、その実は極めて強く結びついています。たとえば活版印刷術によりルネサンス期に出版された古典ギリシア語の辞書。そこでは語の意味がラテン語で説明されています。これはまぎれもなく「言語文化」の産物ですが、同時に、ルネサンス世界による古代ギリシア世界の受容として、地域と時代を超えた「超域文化」の問題ともなります。また、人間が作り出す新技術とさまざまな文化現象を考えるとき、「人間文化」に関わりますし、そしてこの人間の活動を具体的かつ普遍的に捉え、技術や文化のはらむ微妙なニュアンスを問うならば「感性文化」の問題となるでしょう。

したがって、本論系でも各プログラムは緊密に連携し、地域や時代、既成の学問ジャンルの枠を超え、各文化圏相互の関係分析や比較研究を行うことにより、人間が織り成す文化の複合的な構造を根本から解き明かすことを目指しています。そのために海外留学を奨励し、外国研究機関との連携のもと、国際舞台で活躍できる人材を養成しています。また、多種多様な科目と履修形態により、影響・対比研究やアーカイブ操作、フィールドワーク、現地実地研修、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションなど、さまざまな研究手法と幅広い視野を身につけられることも本論系の特長です。

２．教員・助手紹介

氏名	プログラム	専門分野
上野 和昭	言語文化	日本語の歴史と方言
國弘 暁子	人間文化	文化人類学、宗教人類学、ジェンダー研究
小林 信之	感性文化	美学、感性文化論、現代哲学
酒井 智宏	言語文化	ヨーロッパ言語学、言語哲学
坂上 桂子	超域文化	美術史、モダンアート
陣野 英則	言語文化	日本古典文学、平安時代文学、物語文学
高橋 透	感性文化	先端テクノロジー論、サブカルチャー論
高橋 利枝	感性文化	メディア・コミュニケーション論、異文化コミュニケーション論
寺崎 秀一郎	人間文化	中南米考古学
松前 もゆる	人間文化	文化人類学、移民および出稼ぎの研究、仕事の人類学、ジェンダー、エスニシティ
宮城 徳也	超域文化	西洋古典学、ルネサンス研究、異文化受容研究
山田 真茂留	超域文化	社会学、集合的アイデンティティ研究、現代社会論
楢山 満照	講師（任期付）	東アジア美術史、中国文化、銅鏡研究
小泉 咲	助手	平安時代文学、物語文学
峯尾 幸之介	助手	現象学的美学、初期現象学（ミュンヘン・ゲッティンゲン学派）

３．複合文化論系室について（＊新型コロナウイルス流行により現在は閉室しています）

開室：授業期間中の平日 10:30～18:30（助手が在室）、休業期間中は不定期

場所：戸山キャンパス 33 号館 8 階 808 号室（複合文化論系室３）

Tel：03-5286-3597（内線：72-3583）　E-mail：info@fukugo-waseda.jp

Web：http://www.fukugo-waseda.jp/　Twitter：@fukugowaseda

＊お問い合わせは E-mail や Twitter のダイレクトメッセージをご利用ください。

807 号室（論系室２）も申請すればグループワークに使用できます。PC、プロジェクタなど完備。

４．プログラムについて

言語文化プログラム

ことばは人間のあらゆる精神活動の基盤である。ことばに関して研究することは、言語学者だけの仕事ではない。人文科学を志す者にとって、ことばの問題を避けて通ることは不可能である。本プログラムは、ことばに関するさまざまなテーマに関心を抱く学生に、言語学の基礎を踏まえつつ、各自の研究を自由に展開することができる場を提供する。もちろん本プログラムでは、ことばの問題を通じてさまざまな文化現象を研究することも可能である。

人間文化プログラム

本プログラムは、時間と空間の枠組みを超えて、人間文化の複合的諸相を統合的視点に立って解明することを目指す。授業に関しては、フィールドワークが重視され、その構成は理論と実践をつなぐインターフェイスの科目群からなる。まず文化人類学の理論と方法論を体系的に習得した後、ゼミにおいては人類学の知識を実践の場に還元する応用人類学に重点を置いて学ぶことになる。卒業後の進路として、国際機関への就職、大学院への進学（海外も含む）などが挙げられる。

超域文化プログラム

異なる複数の文化体系が接触する場において、どのような現象が生じ、社会・文化のどのような変容が見られるのか。過去の異文化接触がいかなる新たな文化の潮流を形成していったかを知り、また現代世界の諸問題を異文化コミュニケーションの現実として多角的にアプローチし、多様化する世界の現在から未来を展望していく。また、言語・民族・国家・時代を超えて多様に連関する文学・芸術活動を比較・対照しつつ検討することで、人間の表現活動全般についてのより深い理解と認識を獲得することを目的とする。

感性文化プログラム

「味わい」、「装い」、「演じ」、「創り」、「愛し」、そして「死を恐れる」人間。しかしなぜ私たちはそうせずにはいられないのか。本プログラムはこの問いを前提として、人間の日常の行為と情動を、文化・社会のダイナミズムにおいて論ずる。それは、新たな思考と感性の可能性を探求することでもある。制度化された学問それ自体に対しても批判的であるような新しい学問的視野とその方法を模索し、文化の未来学を目指すと同時に、教員と学生の共同作業を実践するなかで、文化創造に向けての脱時間的・脱地域的な視野と価値理論を獲得することを目的とする。

５．ゼミと履修モデル

【言語文化ゼミ】

・上野和昭先生「ことばの歴史・ことばの地理」

このゼミでは、とくに日本語を対象として「ことばの地理、ことばの歴史」を中心に研究する。3 年生のときは、地域言語調査（言語の地理）と文献の読解・調査・検討（言語の歴史など）とを、ともに全員で学ぶが、4 年生になってからは、そのいずれかを選んで、または両方を関連付けて研究し、ゼミ論を執筆する。複合文化論系という名前にもあらわれているように、日本語研究という「主軸」に、文学・社会・歴史・思想・教育など、学部の授業などから学べるさまざまな学問を「交差」させて、新たな視点から言語に関連する事象を考察することを心がけてほしい。例年 12 月後半に、全員で合宿してゼミ論発表会を行っている。

学生像	日本語を対象とした言語学・言語文化論的研究に関心のある学生。
将来の活動フィールド	日本語学関係の学界（大学院進学）、教育界（国語・日本語）のほか、公務員（地方行政など）になる人、銀行や企業に就職する人もいる。
履修が望ましい外国語	特に指定しない。
ブリッジ科目	現代の日本語／日本語の文化史／ことばと社会／日本語学概論 1・2／日本語史 1・2／言語史の方法
ゼミ・演習科目	【ゼミ】言語文化ゼミ（ことばの歴史・ことばの地理） 【演習】現代日本語研究 1・2／日本地域言語研究 1・2

2019 年度ゼミ論文題目

青森県青森市における方言の使用意識と共通語化 ／ 大学生の敬語の使用実態と誤用意識 ―「バイト敬語」を中心として― ／ 大学生の使用実態に見る現代オノマトペの意味拡張 関西弁使用キャラクターが物語において果たす役割 ／ 現代日本語の色彩語使用について ／ 国語辞典の序文と編集方針の関連性について

・酒井智宏先生「ことばの科学・ことばの哲学」

言語または言語学に何らかの関心のある方のためのゼミです。言語学はみなさんの多くにとって馴染みのない分野ですので、以下 Q&A 形式でゼミを紹介します。ぜひイメージをつかんでください。

Q1. 研究テーマに制限はありますか?

A1. ありません。これまでに次のようなテーマに関わるゼミ論文が作成されました。音楽と言語、絵画と言語、ジェンダーと言語、バーチャル方言、ファッション雑誌におけるカタカナ表記、やさしい日本語、誤解と語用論、笑いと語用論、日本語の「思う」と「考える」の異同、日本語の疑似条件文、日本語の複数標識「たち」、認知言語学、比較言語学（とくにゲルマン語）、etc.

Q2. 対象とする言語に制限はありますか?

A2. ありません。日本語を含めて世界のどの言語を選んでも OK です。時代も問いません。複数の言語の対照研究や、エスペラントのような人工言語の研究も考えられます。あるいは、対象言語を限定せず、「そもそも言語とは」という一般言語学的・生物言語学的・哲学的な考察も歓迎します。

Q3. {たくさんの言語を知っている and/or 特定の外国語に堪能である} 必要がありますか?

A3. ありません。常識的な日本語力と大学受験程度の英語力があれば大丈夫です。プロの言語学者の中にも語学が苦手/嫌いな人はたくさんいます。「言語学」と「語学」は違います。

Q4. 語学好きである必要はないとのことですが、では言語の研究にとって必須の能力とは何ですか?

A4. 文献を精読し、人類が気づくことさえなかった問題を発見・共有し、粘り強く丁寧な議論を組み立てて唯一の正解に至る科学的・哲学的思考力です。全員が興味をもってこの課題に取り組めるように、ゼミ生が話し合って統一テキストを選び、互いに助け合いながら、一行一行時間をかけて輪読します。

学生像	日本語を含む世界の諸言語を対象とした理論言語学・言語哲学、ならびに言語学に関する科学哲学的研究を志す学生。
将来の活動フィールド	外国語・日本語関係の教員・研究者、出版･放送・ジャーナリズム関係など。
履修が望ましい外国語	特に指定しない。
ブリッジ科目	言語学入門／認知言語学入門／語用論入門／ヨーロッパのことばと文化／フランス語学概論
ゼミ・演習科目	【ゼミ】言語文化ゼミ（ことばの科学・ことばの哲学） 【演習】日常言語の論理学／文法の理論／言語と文化／意味と文脈

2019 年度ゼミ論文題目

差別語をめぐる対立の実相 ／ CVCV 型オノマトペの構造と意味における子音の音声素性について ／ 念頭におくこと/指示すること ―「念頭におきつつ指示していない」用法に基づく確定記述の分析― ／ 記述否定とメタ言語否定は両立不可能か ―前提取り消し否定に関する考察をもとに― ／ 「起点（時・場所）」を意味する格助詞「に」と「から」の交替の条件 ／ 英語の口語ナラティブにおける歴史的現在の選択動機 ―私的表現としての歴史的現在― ／ 「テクレル」文が表示する恩恵的意味と行為の方向性の仕組み ／ 間接引用が「言われていること」の報告にならないのはなぜか

・陣野英則先生「ことばと文学・ことばと美意識」

担当教員が日本文学を専攻していることから、授業の中で教員が提示する実例、課題などは、日本語と日本文学に関わることが中心となる。また、美と美意識に関することがらも、日本文化関係をとりあげることが多くなるだろう。とはいえ、日本のことば、文学、文化等々が「日本独自のもの」であるといった前提を極力排して向きあうことを重視するので、各人のゼミ論文でも、積極的に日本以外のことば、文学、文化とのかかわりを考えてほしい。

あわせて、（1）前近代のことば、文学、文化に留意すること、（2）近代以降に西欧のことば、観念などとの接触がもたらしたものを意識すること、（3）日本の言葉、文学、文化が海外

でどのようにみられ、また受容されているのかをとらえること等々により、複眼的な思考の芽をはぐくむことを期待する。

学生像	文学（とりわけ日本の古典から近現代の文学）に関心をもつ学生。 ことばと美意識のあり方に関心をもつ学生。 世界の中で日本の文化がいかにとらえられているのかということに関心をもつ学生。
将来の活動フィールド	一般企業（特に文化活動に関わる業種など）、出版・ジャーナリズム・広告関係、公務員、教職（中学校・高等学校の国語科）、大学院進学および研究職（日本の文化・文学など）。
履修が望ましい外国語	特に指定しない。
ブリッジ科目	日本文学史１～６／神話と伝説の世界／物語文学の世界／和歌文学の世界／鎌倉・室町の文学／近世小説と俳諧／近代の文学と文化／現代の文学と文化１・２／文化の哲学／近代日本の思想空間
ゼミ・演習科目	【ゼミ】言語文化ゼミ（ことばと文学・ことばと美意識） 【演習】日本の美意識／日本古典文化の受容と変容／世界のなかの日本のイメージ

2019 年度ゼミ論文題目

日本における「名前」の機能 ／ モーリス・ベジャール『ボレロ』にみるバレエの越境性 ／ 日本における懐古と捏造 ／ 現代の日本の子どもたちと「死」の関係 ／ 「ジブリ飯」と現代の食生活 ／ 旅に対する価値観とその影響 ―『小倉百人一首』の歌人たちとその時代― ／ 日本における集合住宅とこれから ／ 「見る」ということとは ―インスタレーションアートを通して― ／ 日本人の〈書く〉こととフォントへの美意識 ／ 能楽の形成と庶民との関わり ／ 日本におけるミニマリズムの受容と変遷 ／ 日本の接客サービスへのまなざし ／ 表現としての涙・泣くこと ／ 日本における e スポーツ文化の後進性

【人間文化ゼミ】

・寺崎秀一郎先生「文化ツーリズム論」

1987 年に提唱された「持続可能な開発」の一形態として観光開発が注目され、近年、観光産業は世界経済の中で、重要な位置を占めるに至っています（2008 年にはその経済規模は世界の国内総生産の（GDP）の約 9.9%＝5 兆 8,900 億ドルに達しています）。増大する観光客のニーズは多様化していますが、その中で、各地の文化/文化遺産も「資源」としてとらえられる傾向にあります。ゼミ担当である私自身もメキシコ、チアパスのラカンドン族の集落で、ジーンズに T シャツ姿でマウンテンバイクに乗っていた若者が、観光客が到着した途端、彼らの民族衣装である貫頭衣に着替える姿を目の当たりにしたり、ホンジュラスにおいては先スペイン期遺跡の保存修復整備事業に青年海外協力隊の隊員として参加し、その経験をきっかけに中米における主要観光資源である先スペイン期遺跡と現代社会の関係に注目するようになりました。本ゼミではツーリズムということを入り口に、文化/文化遺産を継承する人びと＝ホスト側とそこを訪れる観光客＝ゲスト側の双方において、文化はどのように語られ、あるいは再構築されていくのか、あるいは、その未来はどうなるのか、といった問題を起点に人類社会の多様性や多文化共生型社会について、ゼミ生のみなさんと共に考えていきたいと思っています。研究対象地域は、日本を含む世界中です。

学生像	①「文化資源」の現状と課題、その将来について関心がある学生。 ②地域文化の継承と発展に取り組む気概のある学生。 ③フィールドに出向き、現地の人びととの協同を志す学生。
将来の活動フィールド	大学院進学、旅行、観光、マスコミ、銀行、損保、食品、製薬、公務員等。つまり、進路としては、他ゼミ・他論系・他学部と比較して大きな差異はない。 なお、3 年生を対象に秋学期（10 月頃）には就活を終えた 4 年生による就活ガイダンスを実施している。
履修が望ましい外国語	学術論文を読解できる英語は最低限必要。その他の外国語については、研究対象地域による。どんな地域で何をやりたいかということが第一義であり、外国語は当人の目的を達成するための手段であることを自覚の上、努力してほしい。
ブリッジ科目	文化人類学の最前線 1・2／文化人類学 1・2／国民国家と文化 （上記科目については 1～2 年次に履修することが望ましい）
ゼミ・演習科目	【ゼミ】人間文化ゼミ（文化ツーリズム論） 【演習】民族文化論／物質文化論／植民地主義と人類学／資源・グローバリゼーション・その崩壊／開発人類学

2019 年度ゼミ論文題目

大型農産物直売所と「やりがい」 ―神奈川県横須賀市「すかなごっそ」と周辺農家の事例― ／ 秋田竿燈まつりにおける女人禁制の実態と今後の展望 ／ 日本におけるキリスト教イベントの発展と人々の行動 ／ 観光を通して考える岩手県創生 ／ 高齢者のライフヒストリーから見る生きがいのある高齢生活 ／ 現代人にとってのサードプレイス ～小さな呑みの場での新たな居場所形成の事例～ ／ 新しいライフスタイル：アドレスホッピングの諸相 ／ 中央線沿線文化人類学 ～〈中央線沿線文化〉という抽象概念～ ／ 食から形成される地域コミュニティのあり方 ～子ども食堂・子ども宅食の実践～ ／ 鎌倉から見る観光と地域住民 ～観光地の地域への影響～

・國弘暁子先生「宗教への人類学的アプローチ――宗教の人類学」

「無宗教」という言葉の使い方について考えてみましょう。特定の儀式や教義に基づいた組織に関与しないことを理由に「無宗教です」、と答えるひとは多いと思います。その一方で、正月には神社で祈祷を行い、夏の神事に参加し、お盆の時期には先祖供養をする。これらの行為は、国外の人からすれば立派な宗教的な行為であり、言動が矛盾していると彼らから思われてもおかしくありません。このような宗教に関する認識のズレが生じるのは、日本語の宗教という言葉の歴史にあるという指摘があります。日本語の宗教とは、西洋社会のキリスト教のような教義体系を意味する言葉として、明治初期に、西洋人との交渉の過程でつくられたものです。よって、地縁にもとづいた神事への参加や先祖の供養といった行為は、日本語では宗教という言葉の括りに入らないというわけです。

このような言葉の成立背景を踏まえたうえで、日本語の宗教という括りを一旦取り払ってみましょう。そして、祈る、弔う、祝うといった人間の行為に着目して日本国外を見渡したとき、これまでは宗教の問題だから私たちには関係ないと片付けていた問題が、実は私たちにも相通ずる問題であったことに気づくかもしれません。私たちとは異なる環境で暮らす人々の営みについて学ぶことは、私たち自身のあり方を問い直す作業にもなります。

このゼミでは、様々な地域で生起する問題群に対して関心を示し、柔軟な思考でもって解釈しようとする態度、そして、慣れ親しんだ考え方から距離を置いて、別の視点から現状を捉え直してみようとする姿勢をもつ人物の参加を歓迎します。

学生像	自分とは異なる生活習慣や考え方をもつ人々に対して興味関心を持ち、その人々と積極的に関わろうとする気概のある学生。
将来の活動フィールド	一般企業への就職、公務員、大学院進学、海外留学など
履修が望ましい外国語	英語は必須。その他、調査研究に必要となる言語。
ブリッジ科目	文化人類学の最前線 1・2／文化人類学 1・2／アジアのジェンダーとセクシュアリティ
ゼミ・演習科目	【ゼミ】人間文化ゼミ（宗教への人類学的アプローチ） 【演習】文化人類学入門／フィールドワーク入門／コミュニティとナショナリズム／ジェンダー人類学／植民地主義と人類学

2019 年度ゼミ論文題目

食の観点から見る宗教活動 ／ 日本の生理用品とそのイメージ ／ 日本における犬肉食と法規制を考える ／ 日本における身体装飾 イレズミとボディアート ／ なぜロリータ・ファッションを纏うのか —ロリータの精神と憧れ— ／ 現代人が行うペット供養の形 —都内近郊の寺院を比較して— ／ 井の頭公園の「ストリートミュージシャン」・「ベジタリアン」・「環境バカ」 ／ 化粧からみる普通 〈就職活動における化粧の役割〉 ／ 何故ツイッターで流言が拡散されるのか —メールおよび LINE と比較して— ／ 日本におけるベジタリアンのいま ／ ドッグランの成り立ちと飼い主間の相互行為 ／「ジャニーズファン」であること —ジャニーズファンコミュニティにおけるアイデンティティに関する考察— ／ Swedish Lifestyle in Terms of Living Alone and discussion of the relation with Swedish Welfare Policy ／ 教会における天理教の信仰とコミュニティ

・松前もゆる先生「移動・移住の人類学——移動する人やモノ、および多文化状況の研究」

移民や難民についての話題がしばしばニュースで取り上げられるなど、人の移動・移住は、現代世界において最も注目される社会現象のひとつと言えます。日本においても、周囲を見渡せば、さまざまな場で外国人の姿を見かけるようになりましたし、また、災害等によって移動・移住を余儀なくされる人は国内外で存在しています。こうしたことを背景に、本ゼミでは、移動・移住をキーワードとして私たちのくらす日本を含む現代世界をとらえ直し、移動・移住がうつし出す文化や社会のありようと諸課題について、文献購読とフィールド調査から多角的・実証的に検討することを目指します。

また、現代世界において人の移動・移住を考えることは、移動する人々と受け入れる人々との関係、つまりは異なる文化的背景を持つ人々がいかに共にくらし、地域社会を形成していくかを問うことにもつながります。さらに近年、外国出身の女性たちが先進諸国のケア労働を担い始めたことによる「国際移民の女性化」「ケアの国際分業」といった現象も指摘されていて、ジェンダーや労働、家族などを問い直すことにもつながると考えられます。移動・移住を切り口に、国際社会の課題から身近なことがらまで、文献調査とフィールド調査から得られる知見を共有しながら、考察を深めていきましょう。

学生像	①自分とは異なる文化、異なる立場の人たちのくらしや考え、ものの見方に関心を持つ学生。 ②国際的、あるいは国内での人やモノの移動、それにともなう社会の変化や課題について考えてみたいと希望する人。
将来の活動フィールド	一般企業、公務員、国際機関や NGO・NPO への就職、大学院進学、海外留学などが期待される。
履修が望ましい外国語	英語。その他、調査研究に必要な言語についても積極的に履修することが望ましい。
ブリッジ科目	文化人類学の最前線１・２／文化人類学１・２／国民国家と文化
ゼミ・演習科目	【ゼミ】人間文化ゼミ（移動・移住の人類学） 【演習】文化人類学入門／フィールドワーク入門／植民地主義と人類学／コミュニティとナショナリズム／ジェンダー人類学／グローバリゼーションと人間の経済

2019 年度ゼミ論文題目

国際結婚と多文化共生、変容し続ける日本社会 ―日本人ムスリム女性の視点から― ／ 在日外国人高齢者のケアの課題点 ／ インバウンド観光の意義と課題 ／ 職場における多文化共生 ―外国人留学生の就職支援を中心に― ／ 教育現場における多文化共生

【超域文化ゼミ】

・坂上桂子先生「都市と美術」

私たちの暮らす都市には、広告やデザイン、ファッション、パブリックアート、建築空間が豊富にあって、“視覚文化”に溢れています。また美術館や画廊など“アートの展示場”では、つねに展覧会も開催され、視覚（ヴィジュアル）的要素は、現代社会において大きな意味をもつようになりました。そこには、社会のさまざまな問題が反映され、古今東西の多様な文化が共存し、混在するのを見出せます。現在の東京では、都市の生活空間にかかわる問題は、とりわけ重要な課題となっています。授業ではこうした身近な都市環境を、とりわけ美術という視点から捉え、仲間とともに実見・体験し、分析・考察を行っていきます。アートと社会にかかわる問題を、都市、異文化、生活を切り口にとらえることが目的です。授業では私たちの豊かな生活や社会を生み出し、発展させる要因として、アートやデザインはどのような力をもちえるのかその可能性を探ります。

学生像	（１）都市とアート（パブリックアート、街並み、建築）、芸術と社会（美術、視覚文化、デザイン、広告、ファッション、ミュージアム）の問題に関心のある学生。 （２）国際交流（とくに日韓の交流）に貢献したい学生。（漢陽大学人文学部、慶熙大学美術学部、成均館大学建築学部との交流授業を春学期にソウルで行います。） （３）西洋、東洋、日本のどこかに片寄るのではなく、より広い視野から見渡し、考えることができるようになることを目指す学生。

将来の活動フィールド	＊アートに関わる知識や異文化交流の体験を活かせる場。 ＊これまでの具体的就職先および進路：広告会社、出版社、航空会社、商社、通信会社、銀行、保険会社、公務員、大学院進学（海外を含む）など。
履修が望ましい外国語	自分が研究テーマとしたいトピックともっとも関係ある言語を習得していることが望ましい。例：ウォーホルの広告美術→英語／ガウディの建築→スペイン語／バウハウスのデザイン→ドイツ語／未来派の絵画→イタリア語／デザイン都市ソウルのメディア戦略→朝鮮語／ゴッホ、モネの夢見た日本→フランス語 ＊韓国の大学との交流授業をしますが、とくに韓国語の知識が必要というわけではありません。
ブリッジ科目	西洋近代美術／芸術論争の歴史／芸術と社会（都市と美術）／美術史への招待 1・2／異文化の伝播と受容／異文化接触と日本文化／東アジアの美術工芸／以上にあげた科目のほか、アート、イメージ、美術、視覚文化に関連する内容の講義科目を、地域・時代にかかわらず、なるべく幅広く履修しておくことが望ましい。
ゼミ・演習科目	【ゼミ】超域文化ゼミ（都市と美術） 【演習】創造の交流点／世界のなかの日本のイメージ／東アジアの文化遺産／アジアの美術と思想／世界の工芸にみるデザイン

2019 年度ゼミ論文題目

三宅一生の活動におけるイサム・ノグチの存在 ―ノグチから受けた影響と二人の共通点― ／ 奈良美智 ―作品の変遷と受容について― ／ 今日における東京国立近代美術館の意義 ～本館展覧会を中心に～ ／ メアリー・ブレアの生涯と作品 ／ 田中一村の描いた自然 奄美大島時代の作品について ／ 城塞都市ウィーンにおける都市景観の形成と保存について ／ 板谷波山の作品に見るアール・ヌーヴォーと日本の陶芸の近代化 ／ 常玉にみる「瓶花」と「盆花」

・宮城徳也先生「文化変様論――文化変容とその展開」

異文化が他の文化との接触によって新しい文化を生み出していくことに興味を持つ学生を対象に、文化の変容と創成を一緒に考えていきます。個々の文化を深く学び、理解するためには多くのハードルをクリアしなければなりませんが、本ゼミはその出発点に立つことを企図して、手に届く範囲の日本語文献、英語ウェブページを批判的視点を持って精読しながら、何かを理解するために次に何をすべきかを自分の頭で考えていく姿勢をともに築いていきたいと思います。

担当教員の関心はイタリアを中心とするヨーロッパがいかにギリシャ・ローマ文化の影響を受けながら、それとは違うものを作り上げていき、それが日本を初めとする世界各地に影響を与えたことにありますが、別の視点から、文化の変容に関心を持っている人も歓迎したいと思います。それぞれの興味を活かしながら、自分のテーマを掘り下げて、それをわかりやすく伝え合えるような、そのようなゼミにしていきたいと思います。

過去のゼミ論のテーマは多様で、ヨーロッパと日本の言語、美術、建築、思想、文学、歴史、食文化、庭園、都市、多文化共生、宗教が取り上げられました。担当者は多くの場合、適切な指導、助言を行なうと言うよりは、皆さんと一緒に勉強していく姿勢ですが、その中で、韓国や東南アジアを研究してゼミ論をまとめた人もいました。どのような場合でも、核になるのは「異文

化の伝播、受容、変容」で、その中から新しい文化が形成されていくことに、関心があることを前提としています。

この趣旨は、文学テクストからアプローチする場合でも変わりません。ギリシア神話やキリスト教の聖人伝説に見られる「物語」が、文芸作品のみならず、歴史、哲学、絵画、彫刻、音楽、演劇、映像など多くの思想、芸術や、日常生活に深く影響していったかもヒントに、私たちの文化や芸術、文学創造の個々の問題を様々な角度から取り上げて、皆さんと一緒に勉強していきたいと思います。文化の伝播と受容、その変容、新しい文化の創成、それによって生まれた多くのものに関心のある皆さんは是非、一緒に勉強して行きましょう。

学生像	「異文化受容」「異文化交流」「文化変容」に興味を持ち、自分でテーマを決め、それをゼミの仲間たちにきちんと説明できるだけの調査・研究とプレゼンテーションをできるよう努力する人。
将来の活動フィールド	卒業生は様々な業種に職を得ているので、どの分野に進んでも、大学で獲得した「学ぶ姿勢」を仕事に活かせる人材になってほしい。
履修が望ましい外国語	必修の英語、基礎外国語を基盤に選択外国語等の履修によって、外国語への興味を持ち続けていることが望ましい。
ブリッジ科目	異文化受容と文学の変容／比較文学入門／ギリシャ・ローマ世界入門／ギリシャ・ローマの思想と文化
ゼミ・演習科目	【ゼミ】超域文化ゼミ（文化変容論） 【演習】時代の刻印／主題系の研究／世界の中の日本のイメージ／アートコミュニケーション／創造の交流点／集合的アイデンティティ論

2019 年度ゼミ論文題目

学生服の持つ意味 ―「着せる側」「着たい側」の視点から― ／ 日韓男女から見る化粧の変化 ／ 現代の西洋ファッションにおける「ジャポニズム」 ／ ヒーローと悪役 ―冒険物語における彼の関係と関わり― ／ 日本大学生における原作とディズニー映画の受容 ～『ピーター・パン』と『くまのプーさん』を通じて～ ／ 日本におけるチョコレート文化の変容 ／ 茶道からみた日本らしさ ／ スタジオジブリの食 ―ジブリ飯はなぜ人々を惹きつけるのか― ／ 人形とのかかわりに見る人間観の変遷 ／ 東西における人間と動物との関係 ―グリム童話と日本昔話の比較から読み解く― ／ 『神話論理』・『アドニスの園―ギリシアの香料神話』に見る、レヴィ＝ストロースの神話理論と手法の有効性 ／ ジル・ドゥルーズのマゾッホ、ニーチェ研究を通したギリシア神話世界観の考察 ／ シェイクスピアの女性像 ／ 英雄を目指した青年君主 ―アレクサンドロス大王の神格化―

・山田真茂留先生「集合的アイデンティティの諸相」

近代化ならびに現代化が進展するにつれ、伝統的な共同体志向は次第に稀薄化し、一般に個人主義化ないし個人化の流れが浸透することになりました。近代主義的な理念で言えば、われわれはあらゆる個別的状況を離れ、一個の個人として各種の事実判断と価値判断をしていかなければならない、ということになります。しかしながらその一方、一人ひとりの生は所属集団や帰属集団のありようの影響を強く受けます。また、諸々の集団が織りなす文化の力によって、諸個人の意識と行動の多くが左右されているというのも言うまでもありません。さらに近年、エスニックなものにせよナショナルなものにせよ近代組織的なものにせよ趣味的なものにせよ、さまざまなところで集合的な文化や集合的なアイデンティティが目立つようになってきました。

このゼミでは、こうした集団の力、文化の力を十二分に見据えつつ、現代社会における集合的アイデンティティについて多角的に探究していきます。国民文化、地域文化、世代文化、性別文化、宗教文化、組織文化などおよそあらゆる文化は広い意味での集団をベースにしていますし、他方、文化的な堆積物を欠いた集団というものもまずあり得ません。集団の探究と文化の探究は相即不離の営みと言うことができるでしょう。

そして集団、文化、アイデンティティをキーワードに現代社会の集合的諸現象に挑んでいくに際して、このゼミで主として依拠する学問は社会学です。つまり、社会学的想像力を駆使して集合的アイデンティティ現象の数々を読み解いていく、というのが本ゼミの目標にほかなりません。そのために、まずは社会学という学問それ自体に関する基礎的な鍛錬が重要になってくるでしょう。ただし、一つの学問的基礎をしっかりと修めたうえで、さらにその一歩先を目指し、学際的な視座を養って隣接諸学問との協働を行うのも、また学問的世界それ自体を超え出て生活世界そのものへと帰還ないし飛翔していくのも、とても大切なことだと思います。

このゼミは文化構想学部・複合文化論系の超域文化プログラムの中に位置づけられます。それは大学の中で最も学際性の強い（その意味で非常に自由度の高い）プログラムと言うことができるでしょう。社会学を確固たる足がかりとしつつも、それを軽々と、みんなで越えていくことが可能かもしれません。人が喜びに震え、哀しみに涙するのも、ただ一人でそうしているのではありません。たとえその場では物理的に一人きりだったとしても、そこにはさまざまな関係的、集合的、文化的な背景が存在しています。ゼミという集合的な場で知性と感性をともに磨いていくことが出来ればと念じています。

学生像	文化と社会の関係に対して探究意欲がある学生。好奇心の強い人。社会科学系と人文科学系にともに関心のある学生。あらゆる文化現象、社会現象に対して感性を研ぎ澄ませてアプローチしていきたい人。
将来の活動フィールド	メーカー・情報通信・マスコミ・金融などの一般企業、官公庁、教育・研究職など。
履修が望ましい外国語	とくに指定しないが、好きな外国語があるのが望ましいというのは言うまでもない。
ブリッジ科目	社会学概論 1・2／社会学研究 5（集団・組織論 1）／社会学研究 6（集団・組織論 2）
ゼミ・演習科目	【ゼミ】超域文化ゼミ（集合的アイデンティティの諸相） 【演習】集合的アイデンティティ論／若者、メディア、グローバリゼーション／感性哲学／世界のなかの日本のイメージ／時代の刻印

2019 年度ゼミ論文題目

現代における消費社会の諸相 ―体験価値の高まり― ／ 笑いのツボ ―コントという「お笑い」 ／ 日本人の礼儀観とその展望 ―対人関係観の比較から ／ 現代における音楽文化の拡散と均質化 ―展開とその後― ／ 少子化という問題 ―人口・家族・労働の観点から ／ スポーツから見るナショナリズム ―2020 年東京オリンピックを中心に― ／ 現代における対人関係と居場所

【感性文化ゼミ】

・小林信之先生「現代の文化哲学――美／死／エロス」

わたしたちは生身の身体をもち、衣服を身にまとい、生きとし生けるものを食し、この大地に住まいを定めます。わたしたちは、見、聴き、味わい、触れることによってこの世界を生きるのです。しかしそれは、わたしたち個人の閉ざされた身体内の出来事ではありません。わたしたちは、他者と関わり共生することで初めてこの世界へと開かれた存在となります。他者を愛し憎み、共感しあい、やがて死にゆく存在、それがわたしたち人間です。このゼミでは、このように生身の身体とともに生き、この世界を他者と共有し、有限な存在であらざるをえないわたしたち自身の有り方を問題にします。

具体的な主題としては、以下のようなテーマ系があげられます。いずれも哲学的な基本テーマですが、同時にわたしたち自身の身近な具体的問題にかかわっています。

【自己と他者】「わたし」とは何かという問いかけは、哲学的にものを考える出発点です。しかし「わたし」だけを孤立化させて考えつづけても、けっきょく蛸壺に落ちこむだけでしょう。「わたし」とはつねに他者関係ぬきに考えることのできないような何かなのです。

【時間と物語】わたしたちは物語る存在、言語的存在です。過去を記憶し、未来に想力を働かせるとは、言語的に物語を構築することにほかなりません。この意味でわたしたちは、時間的な存在でもあるのです。

【空間と身体】わたしたちは、生身の身体的存在であることで、豊かな空間的意味を獲得します。いま現在、わたしのまえに開かれているありありとした知覚の風景をそのままに記述すること、そのような現象学的方法によって「視る」という原初的営為の意味が露わとなるのです。

【エロスとタナトス】この世界の現実に触れ、他者と共鳴しあい、わが身を共振させること、それが感情です。なかでも愛（エロス）は、わたしたちにとって、さまざまな感情の中核をなしていると考られます。他方、わたしたちが生身の存在であるということは、つまりわたしたちが死すべき存在であり、「終わり」ある有限な存在であるということです。わたしたちが自己の存在を問い、哲学という営みが始まるのも、まさに死を死として自覚するときでしょう。このように、わたしたちの存在の根底にある欲望は、「エロスとタナトス（愛と死）」の名で呼ばれてきましたが、哲学者によって思索され、詩人によって直観的に歌われてきたこのテーマを、「愛と死の解釈学」として研究していきます。

【美と創造性】カントという哲学者は、日常的なさまざまな関心を遮断するとき、美しいものを純粋に観照する経験が開かれると説きました。また現代の哲学者オスカー・ベッカーは、「美のはかなさと芸術家の冒険性」について語っています。とらえどころなく移ろう美的現象と、新しい価値を創造する芸術家、この両者はわたしたちの生を豊饒で奥深いものにしてくれます。

学生像	当たり前の日常に目をむけ、耳を澄まし、その細部にふれる感触を味わうことのできる人。 性愛と死、他者と私、言語と感覚など、哲学的テーマに関心のある人。 芸術を初めとする、人間のクリエイティヴな領域に浸かりたい人。
将来の活動フィールド	哲学・美学・芸術学関係の大学院進学、出版・マスメディア、映像制作会社、中学高校教員、公務員ほか。

履修が望ましい外国語	特に指定しない。
ブリッジ科目	文化の哲学（＊特に履修が望ましい）／感性の哲学／美学１・2／美の制度／死の制度
ゼミ・演習科目	【ゼミ】感性文化ゼミ（現代の文化哲学） 【演習】感性哲学／感性文化基礎論／生活環境感性論／視覚文化論／聴覚文化論／現代哲学の諸相／美学研究

2019 年度ゼミ論文題目

「シンデレラ」物語におけるキャラクター像分析 ／ ベルクソンによる正確な形而上学としての持続と待機 ／ 人間は根源的に不幸な生き物か ／ 「音楽を語る」とはどういうことか ―ドビュッシー『前奏曲集第 1 巻第 8 曲 亜麻色の髪の乙女』についての文章を例に― ／ 脱芸術的音楽試論 ―カント以降の認識論に見る二分性を基盤に音楽を聴取することの可能性について― ／ 味覚体験の完全なる共有を目指して ／ なぜ人は「知ること」を求めるのか ／ 剥製の芸術から見出される死生観と美的価値について ／ AI は人間的な自我をもてるのか ～同一性からの視座～

・高橋透先生「現代文明への視座」

学期に 1 回の各自のプレゼンテーションを通じて、2 年間かけて各自のゼミ論を作成してもらう。テーマ選択はゼミ生の自由。（社会に出る前に、ぜひ自分の関心のあることに取り組んで欲しい。）これまでの具体的なテーマ設定としては、広告論 SNS 論、食文化論異文化論、ファッション論、映像文化論、現代文化論（女性の社会進出、香りの文化、美人とは何か、イベント論ほか多数）、WEB 論、映画論、アニメ・マンガ論、文学テキスト分析、現代技術文化論（VR、AR、AI ほか）など。以上に限らず応相談。ゼミ生によって見かけは様々にテーマが違いますが、他人の発表を聞いて質問したり考えたりするうちに、どのテーマも自分のテーマと密接に関わり合っていることに気づくでしょう。それは自分のテーマを論じるのにおおいに刺激になり、参考になるはずです。多様性は現代において最重要なモチーフなのです。このようにして、一緒に作り上げていくゼミを目指しています。

学生像	基本的に文科系の領域であればどのような分野でもゼミに参加可能です。 高橋は、テクノロジーの哲学を専攻していますが、教員の専攻分野に学生の関心分野を限る必要はありません。 ゼミ論テーマ例：広告論（広告一般、広告とイメージ）、日本と海外文化比較、サブカルチャー論、ファッション論、食文化比較論など。
将来の活動フィールド	IT 系企業、金融業、運輸業、アパレル関係、人材派遣企業、その他様々。
履修が望ましい外国語	特に指定しない。
ブリッジ科目	各自関心のある分野を履修してください。

ゼミ・演習科目	【ゼミ】感性文化ゼミ（現代文明への視座） 【演習】各自関心のある分野を履修してください。

2019 年度ゼミ論文題目

企業とソーシャルメディアの未来 ～時代は消費者主導に～ ／ ラグビー日本代表の未来 ―プロリーグがつくる新たな可能性― ／ キャッシュレスが日本の社会と精神に与える影響 ／ 先端技術の発展と未来の「人間らしさ」像 ／ 日韓関係の今後を探る ／ 現代日本におけるヒット曲の法則の考察および二次サービスの考案 ／ 現代アニメソングの性質研究および音楽業界との連携についての考察 ／ 自動運転車の社会がもたらす変化 ／ AR の日常利用に向けて ／ クラシック・バレエとその今後 ／ デジタルアートを利用した空間から提示する街づくり ／ ジャニーズ事務所から見る日本におけるアイドルの変容について ／ ハワイ・オアフ島における社会経済的格差と民族の関係性の考察 ―パロロプレスクールでのボランティア活動を通して考える― ／ ナイトタイムエコノミーを軸とした歌舞伎町の観光振興施策の提案

・高橋利枝先生「メディア・コミュニケーション論――グローバリゼーションとメディア・AI（人工知能）」

私たちはこれまで経験したことがないような変動する世界に生きています。加速するグローバル化とデジタル化、AI（人工知能）化によって、日常生活はチャンスとリスクに満ちています。このゼミでは、このような時代を生きるゼミ生のために、①グローバル化、デジタル化された現代社会におけるチャンスとリスクについて理解を深めるとともに、②コミュニケーション能力を身に付けることを目標としています。

現代社会においてメディア（ソーシャルメディアや AI を含む)は、ビジネス、政治、経済、教育、医療、スポーツなど至る所に入り込んでいます。携帯電話やインターネットは私たちの日常生活において様々な人や文化を結びつけ、グローバル化を推し進めています。このゼミでは共同プロジェクト（YMG: Youth, Media and Globalisation）を通じて、現代のグローバル社会における科学コミュニケーション技術の発展によって得られるチャンスとリスクについて明らかにしていきます。

2020 年度は、「AI・ロボット」や「若者のメディア/AI 利用」に関するプロジェクトを行う予定です。具体的には、東京オリンピック・パラリンピック 2020 におけるメディアや AI/ロボットの利活用や、AI の父であり、コンピューター・サイエンス分野のノーベル賞とも言われる「チューリング賞」を受賞したヨシュア・ベンジオ氏との国際共同調査、ハーバード大学との「若者と AI」に関する国際比較調査など、国内外の研究者と多様なプロジェクトを行う予定です。また、昨年 9 月に行ったケンブリッジ大学との AI に関する国際シンポジウムのようなワークショップなども、ゼミ生みんなで一緒に行っていきたいと考えています。

授業ではまず、グローバル化された現代社会を理解するためにグローバリゼーションに関する文献、またデジタル化や AI 化を理解するためにメディア・コミュニケーションや AI に関する主要な文献の講読やリサーチを行います。そしてゼミ生各々の関心分野によってグループにわかれ、プレゼンテーションを行います。この時、ゼミ生全員は積極的にディスカッションに参加することが期待されます。グループワークによって基礎的な知識を習得し共有すると同時に、スマートフォンやソーシャルメディア、AI やロボットの利用に関する街頭インタビューやビデオ製作、メディアや IT 関係者とのディスカッション、企業とのコラボレーションや他大学との合同ゼミなど様々な実践的な活動も行なっていきたいと考えています。このように本ゼミでは理論的かつ実践的にグローバル社会におけるメディアや AI の社会・文化的役割について理解し、グループワークやプレゼンテーションを通じて各々のコミュニケーション能力に磨きをかけることを目標としています。

学生像	グローバル・リテラシー（語学力、デジタル・リテラシー、コミュニケーション能力）に優れている人。 文化や他者を尊重し、相互理解に努め、よりよいグローバル社会の構築を共に目指す人。グローバル人材。
将来の活動フィールド	マスコミ（テレビ局、新聞、出版）、広告、商社、情報通信、メーカー、金融、大学院進学（海外を含む）、国際機関
履修が望ましい外国語	特に指定しない。
ブリッジ科目	グローバリゼーションとメディア／社会学概論 1・2／文化人類学の最前線 1・2／異文化の伝播と受容
ゼミ・演習科目	【ゼミ】感性文化ゼミ（メディア・コミュニケーション論） 【演習】メディアと異文化コミュニケーション／広告にみる異文化コミュニケーション／若者、メディア、グローバリゼーション／多文化社会論

2019 年度ゼミ論文題目

SNS とファッション Instagram と大学生のつながりからみる消費行動の在り方 ／ AI 倫理に関する若者の意識調査について ／ 日本酒の日本における人気低迷と海外における人気の高まりの実態 ／ 世界で広まる SUSHI 文化と寿司店のあるべき姿 ／ 現代の若者の「シンデレラ・コンプレックス」とお姫様のイメージの関係について ／ 「魅力的な容貌」とは ―「魅力的な容貌」を形成する普遍性をもつ魅力の要素と相対性をもつ魅力の要素― ／ 若者の食意識と食生活 ―若者と食のあるべき姿とは― ／ 現代社会における「暇」の存在 ―消費行動の諸相― ／ ラグビー・ワールドカップ 2019 報道が映しだす日本の多様性 ／ 「ポリコレ映画」の現状と良質な映画とは何かについての考察 ／ 物質性からみる紙の書籍の価値 ／ 離婚の原因から人生の幸せを探る ―結婚において必要な資質とは― ／ 日本のグローバル化に伴う若者移民受け入れ意識の変化 ／東京一極集中緩和へ向けて ―若者の地方への人材分配― ／ Y-ouTube の若者人気 ―大学生の利用と快楽― ／ デジタル化社会における女性ファッション雑誌の情報発信方法提案

【卒業研究】

2019 年度卒業研究題目

ロートレックの人物表象について ／ ソーシャルメディアと新しい世論形成のかたち ／ メカニズムデザインを用いた、心理的安全性を向上させる組織内の制度デザインの提案 ／ 究極のバーチャルリアリティと現実は識別できるか ―ギブソンの知覚論から考える― ／ 変わるストラヴィンスキー、変わらないストラヴィンスキー ―ストラヴィンスキーの「信条」と「成長」について― ／ Mike Kelly《Day Is Done》について

６．進級者受入方針

複合文化論系は、言語文化、人間文化、超域文化、感性文化の 4 つのプログラムから構成されており、これらのいずれか、もしくは複数の分野に興味を持ち、複雑に関連する現代社会の諸要素を、共時的、通時的視点から考察して、時代を予測し困難を切り開く洞察力、広い視野に支えられた知識力、現実の課題を分析し対処する実践力の涵養を志す学生の進級を

希望する。上記の 4 つのプログラムは、一見多様に思われ、事実その通りだが、相互に緊密に連関し、「地域や時代、既成の学問分野の枠を超え、文化圏間の関係分析や比較研究を通して人間が織り成す文化の複合的な構造を解き明かす」という複合文化論系の基本方針を様々な面から支えている。

７．教育課程編成方針

【２年次生】

「地域や時代、既成の学問分野の枠を超え、文化圏間の関係分析や比較研究を通して人間が織り成す文化の複合的な構造を解き明かす」という複合文化論系の基本方針を踏まえながら、開設された、多岐にわたる内容の複合文化論系演習を履修し、本論系の教員も多く担当している文化構想学部、文学部のブリッジ科目の中から興味ある科目を選択しながら、3 年次からのゼミ進級に備えられるようにする。論系の教員や、助手が論系室で相談に応じながら、4 つのプログラムにそれぞれ、3～5 設置されたゼミに進級するか、論系内の教員が指導して、自分で研究を深めて、その成果をまとめる卒業研究を選ぶかを決めてもらう。

【３年次生】

言語文化、人間文化、超域文化、感性文化の 4 つのプログラムに、それぞれ 3～5 ずつ設置されたゼミに進級したか、もしくは論系内の教員の指導のもとに個人で研究を深めていく卒業研究を選択した後なので、ゼミ論、もしくは卒業研究と深く関係する、演習、講義を履修するのはもちろん、論系内に用意された他の演習や、文化構想学部、文学部共通のブリッジ科目からも多くのことを学びながら、ゼミ論、卒業研究の構想をまとめ、その材料を集めて、文献などの資料読解や、フィールドワークの手法を担当教員から学んで行く。3 年次生の大きな関心の一つは、卒業後の進路であり、就職や大学院への進学に関して、ゼミや論系室を通して、先輩たちの体験を聴き、助言が得られる機会を設ける。

【４年次生】

4 年次生の最大の眼目は、卒業後の進路を決め、ゼミ論、卒業研究をまとめ、提出することである。社会に巣立って行く 4 年次生に対し、ゼミ担当の教員、卒業研究の指導教員から、研究方法、論文のまとめ方、社会生活の心構えなどが、助言される。その際の指針となるのも、「地域や時代、既成の学問分野の枠を超え、文化圏間の関係分析や比較研究を通して人間が織り成す文化の複合的な構造を解き明かす」という複合文化論系の基本方針であろう。資料解読、フィールドワーク、論文作成、ゼミと演習の発表等のプレゼンテーションを通じて得られた経験、知識は、就職もしくは進学後の社会的、個人的活動に大いに役立つものと思われる。

８．参考情報

文化構想学部 HP 複合文化論系紹介：https://www.waseda.jp/flas/cms/about/theoretical/isoc/

ゼミ要項（ページ最下部）：https://www.waseda.jp/flas/cms/students/seminar_thesis/

複合文化論系 HP 論系概要：http://www.fukugo-waseda.jp/aboutus/（過年度のゼミ論文・卒業研究題目一覧あり）